

Attempts of <narrative> in Kenji Nakagami's "Jōtokuji Tour"

MATSUMOTO Kai

Kenji Nakagami, who was born in Kumano, a land which inherited various traditions, and was brought up by an illiterate mother in his young age, was a writer with a strong conscious of the <narrative> aspect of the oral tradition. In the short work series from 1974 to 1976 compiled later into the short story collection "Kesho", <oral literature> such as Noh, Noh songs and sermons are used as motifs. There are several prior studies on <oral literature> in the "Kesho" work group, and the relationship between specific concrete classic works as <oral literature> and the short stories of "Kesho" has already been pointed out. Although there are no consideration on the reception of such <oral literature> about other Nakagami works produced at the same time than "Kesho". For other works as well, we must consider the relationship with <oral literature>.

Looking at the "Jōtokuji Tour" ("Bungei Tenbou" written in April 1975) written at the same time that the "Kesho" work group, Nakagami was trying to express <narrative>. In the "Jōtokuji Tour", the hero, who is a tour operator, guides guests including old women participating in a tour around Jōtokuji. Under these circumstances, the old women surround him and talk a lot about their own experiences of the past. The distinctive narratives of old women showed a new horizon as Nakagami, caused <narrative> to express through the work group of the same period. I analyze <narrative> appearing on "Jōtokuji Tour" in detail, while clarifying the importance of "Jōtokuji Tour" which was rarely mentioned until now. I will reexamine the attitude of <narrative> and <oral literature>, and want to show a new direction in the Kenji Nakagami's research.

中上健次「浄徳寺ツアー」における〈語り〉の試み

— 〈語り物〉文芸の受容と、老婆の〈語り〉 —

マツモト カイ
松本 海

1. はじめに

熊野という様々な伝承が受け継がれる土地で生まれ、幼少期には文盲の母に育てられていた中上健次は、口承という形での〈語り〉を強く意識する作家であった。後に短篇集『化粧』にまとめられる1974年～1977年の短篇作品群では、能や謡曲、説経節などの〈語り物〉や芸能作品がモチーフとなっており、口承で伝えられてきた〈物語〉をいかに小説へ転換していくのかといった試みがなされ、中上の苦心の様子が窺える作品が並んでいる。こうした〈語り物〉の受容に関する考察は『化粧』以外の同時期の他の中上作品においてはほとんどなされていないが、具体的な〈物語〉を典拠としていない『化粧』以外の作品においては、中上が当時意識していたこうした〈語り物〉との関係性といった要素は、完全に捨象されてしまっているのだろうか。

『化粧』作品群と同時期に書かれた「浄徳寺ツアー」（『文芸展望』、1975年4月号）を見れば、手法としての〈語り〉を試みようとしている中上の態度が垣間見える。「浄徳寺ツアー」では、旅行会社の添乗員である「彼」が浄徳寺を廻るツアーに参加する老婆ら客を案内する。そうした中で老婆たちは「彼」に対し、また「彼」を取り囲み、自らの今昔の体験を滔々と語る。老婆たちの特徴ある〈語り〉は、中上が同時期の作品群を通して〈語り〉を表出させていく上で、新たな地平を示すものであった。「浄徳寺ツアー」に現れるこうした独特な作品の〈語り〉を分析し、現在まで言及されることの少なかった「浄徳寺

ツアー」の重要性を明らかにしつつ、〈物語〉に対する中上の態度を再検討し、新たな中上健次研究の方向性を示したい。

2. 〈語り物〉文芸の受容

短編小説集『化粧』（講談社、1978年3月）には「修験」（『文藝』、1974年9月号）から「紅の滝」（『季刊芸術』、1977年秋季号）までの〈語り物〉が典拠となっている作品が数多く収録されている。

この頃の中上は、能や謡曲、説教節などの口承で伝えられてきた〈語り物〉に強い興味を抱き、こうした口承で語られつづけてきた〈物語〉をいかに小説へ転換していくのかといったことに挑戦している¹。こうした時期に書かれた「浄徳寺ツアー」にも、民話という形で〈語り物〉が具体的に描かれている。

和尚に促されて、彼は立って、浄徳寺の縁起を説明した。そしてバスが走っている源平峠の故事を説明した。パンフレットに書いてあることを空んじているだけにすぎなかった。浄徳寺、源平峠、それにこの近辺にある民話を話した。〈慈母観音〉とは、梅貴丸というわが子を、ひとさらいにかどわかされた平家のやんごとなき身の女が、乞食となってさがし求め、路端でそのわが子が乞食となって死んだことを知り、狂女となり、貴賤を問わず子供とみれば乳房をふくませんとする話だった。子供に乳房をふくませ、眼を糸のように細め、口元に笑をたたえ、こうこつとした慈母観音の写真が、パンフレットにあった。〈狗の女房〉という話は、人間の女が山奥で狗の女房になって暮らす話だった。人間が狗と暮らすのはおかしいと、旅人は、この源平峠に人をたのんで山狩りに来たが、狗も女もどこにもみえず、旅人は禁を破ったと、祟りにあつて死んだ。母の恩をうたった〈母の業〉というのは、母に溺愛されて育った男が、女を好きになり、母が邪魔になり、浄徳寺の上人が法会をひらくと家より連れ出し、峠の道すがら母を殺そうとした。峠がとたんに崩れた。母は、天にむかって、この

子はわたしを殺そうとしたが、どうかみのがして救ってくれと頼んだがききいれられず、男は、まっ逆さまに峠より墮ちた。それ以降、子供を想って母は、峠に庵をつくってこもり、五穀を断って念仏をとなえつづけた。〈猿の松茸〉という艶笑譚もあったが、有難いお寺旅行にはふさわしくないと、話すのを止めた。年寄りどもは、パンフレットの丸まる棒読みに近い彼の説明を、黙り込んだまま、きいていた。

〈慈母観音〉、〈狗の女房〉、〈母の業〉といった民話は、「浄徳寺ツアー」で主題となっている人間の「生」と「性」の問題を映し出している。「彼」の「女」の妊娠・出産、関口由紀子の母の自殺、老婆の若かりし頃の苦難など、「彼」の周りを取り巻く問題が、〈語り物〉からも照射されている²。

3. 「彼」と「老婆」の〈語り〉の対立

「浄徳寺ツアー」では、作品のモチーフとして〈語り物〉が使われているだけではない。老婆らの〈語り〉が、非常に意識的に利用されている。

宮嶋有華は「浄徳寺ツアー」における〈語り〉について、「人称形式は三人称である。しかし、視点は一人称の作品のごとく常に主人公に寄り添っており、読者は作品中のツアー参加者と同様、添乗員「彼」とともに作品の中を移動するしかない」、また「他者、特に女を軽視し、ツアー参加の老婆らを、名前ではなく「しみ」「歯抜け」といった侮蔑を含んだ呼称で内心区別する」と指摘する³。

地の文での〈語り〉は彼に寄り添い、老婆としての特徴である「しみ」「歯抜け」、「ヘアピース」といった呼称を用いて、老婆らの負の部分を押し出した形で描出する。老婆らに対し優位に立とうとする「彼」であるが、老婆らの会話が示す〈語り〉のレベルでは、「彼」は老婆らに引けを取っている。

「なにが苦勞なものですか、苦勞っていうのは、姉さんみたいなことを言

うのよ。すまないねえ、すまないねえって言いつづけてさ。子供のことは
かり気にしてさ。とめちゃん、あの子は大丈夫だろうね、大丈夫だろう
ねって言ってさ。姉さんの事思うと、泣けてきちまうよ」老婆の声がふ
るえ、つまる。「夜中、なにしてるのだろうと思うとね、あんなにたくさ
ん人の分まで取ってごはん食べたのに、おせんべいを食べてるの。ぽりっ
ぽりっとな音がした。眠りながら、なんの音だろうと考えていた。あのあ
たりは、なんとかせんべいって言って、大きい。それを三枚も四枚も蒲
団の中に引き入れて、ぽりっぽりっ食べる。『お姉さん』とわたしが怒っ
て言うと、『とめちゃんも食べるかえ、欲しきゃあげるよ』『なに言ってる
の』あいた口がふさがらないとはこの事。そんな時は、キ印がだいたい薄
まった時なんですね。キ印がひどい時は、壁の方むいてね、坐り込んでい
るの。黙ったまま。なにを考えていたんだろうねえ、なに思案してたんだ
ろうねえ。雪のふる終日、壁みて、坐ってる。あの病気は、髪が抜けるの
よね。櫛ですいてやると、すっぽりくっついてくるの。姉さんの気嫌の良
い日、金だらいに水を入れてつげの櫛ですいてやるの。水が毛でまっ黒に
なっちゃう。窓をあけて、『ほらあ、雪よお』と言うと、『うん』としか答
えない。窓の手すりに積った雪を、姉さんの手に握らせてやる。『冷たい
でしょ』『うん』もう雪の冷たさすら感じないの。窓から雪におおわれた
山がみえた。まだ降りはじめたばかりで、ところどころ、青っぽい木がみ
えたり、岩がみえたりする」

傍線部以外はすべて「しみ」の老婆の長い台詞である。さらに「しみ」の老
婆の独白における〈語り〉は、会話内に会話が入る形となり、小説内
における「彼」に寄り添うような地の文の〈語り〉とは別の新たな審級での〈語
り〉が生まれている。老婆らの〈語り〉が示す老婆らの〈物語〉は老婆たちだ
けの中で完結している閉鎖的なものであり、「彼」は老婆らの〈物語〉を解釈
するコードを有していない。

また、「彼」は老婆らに取り囲まれ、老婆らによって「彼」の知らない人々の話が繰り広げられる。

老婆たちは、彼の軽薄な口調がおかしいとわらった。「松竹に入ろうか、それともこの旅行社に入ろうかと迷ったんですがね、ほんとうは」「そうそう、あなた覚えている？」しみの老婆が眼鏡に言った。彼は、自分に訊ねたのだと思い、とまどった。「姉さんが、この先の湯治場に来てた時のこと」「なに言ってるのよ、幸ちゃんは、うちで預ってたのに。信ちゃんだって預ってたのに。ひどいのよ」ヘアピースは、彼に向って、秘密をすっぱ抜くというふうに関を突き出して言う。「こっちは新婚一カ月めよ。それがこんな騒々しいのがとび込んできたんだから。石川なんか、なんにも知らないから、びっくりしてたわよ」「石川さんには悪かったわねえ。でもねえ、しょうがなかったのよ、あんた、うらむなら斎藤さんうらみなさい。わたしだってつらかったんだから。まだ二十歳すぎたばかりなのよ、わたし。羞かしいなんたってありゃしない。男はいいよ。斎藤さんはいいわよ。カシで働いて、女遊びやって、酒を浴びるほど飲んで、病気もらって、死んだって。だけど女はなんなのよ。姉さんはなんなのよ。やきもち焼いて、苦しんで、あげくの果て病気移されて、それでもあの人、斎藤さん、好きなの。つらかった。湯治に来たときは、もう病気は脳にまわってるの。狂ってるの。つきそってるわたしは、まだ二十歳すぎたばかりよ。きちんと髪ときつけて着物きせても、駅の待合で、こうよ」しみは、手をあげてひろげる。「またを男みたいに広げてさ」老婆はへっとわらった。ベンチに坐った老婆たちと自分の影が、石砂利の上に短かく落ちていた。「信ちゃん、もういいおじさんだものね、順ちゃんなんか肥っちゃってえ」老婆たちはなにがおかしいのか一斉にわらった。

傍線部では、「彼」が老婆らの〈語り〉の「聞き手」として巻き込まれている

る様子が見てとれる。「聞き手」としての位置を強制されながらも、老婆らの会話の背景がわからない「彼」は、老婆らの語る内容をうまく把握できず、老婆らの笑いについていけない。「浄徳寺ツアー」では、「彼」を取り巻く〈物語〉と老婆らを取り巻く〈物語〉の間に一線が引かれている。しかし両者の物語は「生」や「性」といったテーマでリンクしているものでもある。二つの〈物語〉が作品内で流れることにより、複層的な作品世界が出来上がっている。一方、「彼」自身による〈語り〉はどのようなものなのか。

「さあ、出番だ」と彼は、ことさらに力をこめて言った。わざとらしく欠伸した。「海老さんの時間だよ」彼は、スピーカーをかついだ。スイッチを入れた。鳩は甘酒屋の前におりた。「駄目ねえ、今の若い人は」ヘアピースが弾んだ声を出した。「さんじゃなくて、海老様って先代のことは言うのよ」「いいじゃないのう、ねえ」眼鏡がハンカチで鼻水をおさえつけるようにぬぐいながら、彼の肩を持つ。「どっちでもいいことよお」それから眼鏡は、「どっこいしょ」と声を掛けて、ベンチから立ちあがる。

老婆の長い独白の後、「彼」はスピーカーで増幅させるという象徴的な形で、彼の発話を試みている。しかし「彼」の発話はたちまち老婆たちに遮られる。「どっちでもいいことよお」と語る老婆は、「彼の肩を持つ」かのようなのであるが、「彼」の呼称を定めることについて放棄している点に注目すれば、「彼」の匿名性をさらに際立たせることに加担していると言える。お互いを名前で呼び合う老婆らとは対照的に、「彼」の孤独感が増されており、空虚な「彼」の〈語り〉が印象的に描かれている場面である。

4. おわりに

「浄徳寺ツアー」においては、当時中上が関心を深めていた〈語り物〉が、まずは典拠として、「彼」や老婆、関口由起子を取り巻く状況と重なるように

用いられている。

また〈語り物〉が典拠そのものとして取り入れられるだけではなく、〈口承〉あるいは発話されるものとしての〈語り〉が、作品世界を深めるための装置として働いている。特に老婆らの発話としての〈語り〉は非常に強い力を持ち、「彼」もしくは地の文をも凌駕するかのような地位を時として得る。

「彼」や読者には「不親切」であるかのような、突拍子もなくちぐはぐな印象を与える老婆らの〈語り〉は、しかし老婆たちの中では一貫した〈物語〉として、「涙」や「笑い」という形で「彼」以外の人々の間では共有されている。もう一人の若者・関口由起子でさえ、老婆たちとの交流を深め「涙」を流している中、ただ一人老婆らの〈物語〉に入っていけない「彼」の疎外感は、強められていく匿名性もあいまって、徐々に増していく。そうした中で、内に秘めて膨れ上がった自意識や暴力性を秘めた激しい想いは、彼自身の〈物語〉を完成させるため、ラストシーンでの学生闘争の回想や浄徳寺が燃え上がる幻想へと連なっていくのである⁴。

「浄徳寺ツアー」は、口承としての〈語り〉に焦点をあてた点や、後の中上文学において代表的な登場人物となる「オリュウノオバ」に繋がる、語り手としての「老婆」を印象的に登場させている点において、以降、さらに細かい分析を必要とする萌芽的な作品であるということができよう。

※「浄徳寺ツアー」本文の引用は初出の『文芸展望』（1975年4月号）による

【注】

- 1 短篇集『化粧』と古典の関わりに関する先行研究には、矢田麻美「中上健次『化粧』論——系列化の試みから見えてくるもの」（『中京国文学』、2003年号）や佐藤綾佳「中上健次 短篇小説『化粧』：彼の夢が意味するもの」（中京国文学、2013年号）に詳しい。
- 2 〈慈母観音〉では聖なる観音を狂女とする点や、〈狗の女房〉では畜生である犬が人間の女と結婚する点など、上下関係が転倒、または平準化している点には注意したい。こうした価値の転倒は、白痴の女の子を重要な位置においている部分とも繋がっており、「浄徳寺ツアー」以降の中上作品における主要なテーマの一つとなっていく。こうした点が民話という〈語り物〉を利用した上で見出されている点は見逃せない。こうした〈語り物〉が実際の民話をもとにしているのか、中上のフィクションであるかという点も踏まえ、今後の研究がさらに必要である。

- 3 「中上健次『浄徳寺ツアー』——「ヒロちゃん」の「ツアー」——」（『日本文学誌要』、2013年7月号）
- 4 ラストシーンがあくまで幻想で終わってしまい、「彼」の昇華が中途半端になっている点や、〈語り物〉の典拠が読者には分かりづらくなっている点、老婆の〈物語〉と「彼」の〈物語〉のリンクの仕方が雑な点を鑑みると、「浄徳寺ツアー」はまだ中上文学の中において過渡期的な部分が強
い作品ではある。

* 討論要旨

野網摩利子氏は、「浄徳寺ツアー」以降の作品において、中上健次が「生」と「性」という普遍的なテーマをどのように展開していったのか、と質問した。発表者は、「浄徳寺ツアー」の特徴として、「性」をめぐる語りでは反復性が強調されるのに対して、「生」をめぐる語りでは一回性が強調されており、さらにこのような特徴が『千年の愉楽』など後年の作品にも引き継がれていることから、「生」と「性」に対する中上独自の思想を読み取ることができる、と回答した。

野田見生氏は、複数の語りを取り入れる手法にはウィリアム・フォークナーやガルシア・マルケスの影響も指摘されているため、作家論的な枠組みで考えるばかりでなく、国際的な文脈のなかで中上作品を読み解くこともできるのではないかと指摘した。発表者は、今後は『日輪の翼』における老婆たちの語りと、「補陀落」における二人の語り手について分析する予定である、と具体的な研究計画を挙げて、作家論的な枠組みのなかで考察することの意義を示した。

中川成美氏は、中上が口承の語りを小説に利用したという理解はやや図式的に過ぎるのではないかと指摘した。中川氏はまた、「浄徳寺ツアー」には「生」と「性」のテーマに加えて、おぞましい話を語り尽くすことによって浄化するという「聖」のテーマを見出すことができる、と述べた。